おお大勝利

平成 27 年度山東サッカー部報第 13 号（10 月 1 日）

サッカー部保護者の皆様、ＯＢ・ＯＧの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

追悼 佐竹前校長 突然の逝去

シルバーウィーク最終日 9 月 23 日 17 時 23 分、前校長にして元顧問の佐竹俊明先生が膵臓がんのため逝去されました。佐竹先生は、山東サッカー部監督として山東をインターハイへ導き、校長として平成 25 年度～26 年度在任中もサッカー部の活動を応援して下さりました。最近サッカー場で佐竹先生のお姿の見えないことを不思議に思っていた方もおられたかと思いますが、闘病を続けていたのです。

その日、大体その時間に、私のストップウォッチ機能付きのデジタル時計（G-Shock）が突然動かなくなりました（文字が消えました）。電池切れかと思いますが、たびたび文字が薄らぐのをあの手この手で「復活」させ、ここまで来ていたのですが。何か、偶然に意味を持たせたくなります。

さて、喪主佐竹泰彦様（ご長男）の了解を得て、私が 9 月 28 日の葬儀において読んだ弔辞を下記に掲載いたします。顧問の思いやこれまでの流れがわかるかと思いますので、どうぞご覧ください。

佐竹先生

先生、あまりにも早く逝ってしまいましたね。私はいま、単に残念だ、という言葉では言い表せない空虚感、寂寞感に襲われています。

昨年９月 22 日、約１年前、山形東高校の同僚有志と馬見ヶ崎川原でバーベキューを行いました。先生は「午前中検査に行って来たんだ。思ったより早く終わって。」と言いながら、元気に参加され、お肉を食べ、お酒を飲んでいました。私はふと「どうしてこの時期に身体検査をやるんだろう」と思いましたが、その疑問をぶつけることなく、先生と楽しく過ごしました。今思えば、その検査で膵臓がんが見つかったのですね。約１年間の闘病生活、お疲れさまでした。特に後半は、抗がん剤が合わずに治療に苦しみ、食欲をなくし、痩せ、苦しかったろうと思います。私には、苦しい姿や困った言葉を吐くことはありませんでしたが、大分我慢されたのではないでしょうか。よく闘われましたね。

さて、ここで、佐竹先生の思い出を少し紹介したいと思います。私は平成２年に山東に入学し、先生を含む工藤道汪主任の学年の先生方にお世話になりました。佐竹先生の担当は英語。カリスマ性でグイグイ生徒を引っ張っていく先生方が多かった当時、先生はユーモアを交えながら誠実に謙虚に生徒に対応するキメの細やかな授業をされていました。また、私はサッカー部に入部し、佐竹監督の下、３年間過ごしました。佐竹先生自身は、山東サッカー部ではなく山東フェンシング部のご出身。先生は何回か、前任校でサッカー部顧問をされてからサッカーにのめり込んだ、山東に赴任するときには、当時生徒課長にしてサッカー部顧問の鈴木正浩先生に電話し、「フェンシングではなくサッカー部の顧問をさせて下さい」と内々に頼み込んでサッカー部の顧

問になったんだ、お陰でフェンシング部の方々からは「裏切り者」と非難された、と私たちに笑って話をしてくれました。佐竹先生は、経験者ではないので細かな技術的指導はされませんでしたが、当時の最先端の戦術を勉強されており、われわれ部員も先生のサッカー観に一目置いておりました。「県で勝ってＩＨに出場する」目標の下サッカーに打ち込んでいる我々部員に対して、先生はよく「ＩＨに出て終わりじゃない。ＩＨでベスト８になることが目標。そういう目標を持たないとＩＨにすら行けない。」と仰り、我々を鼓舞していました。私は当時「県で勝ってもいないのに全国ベスト８など何言ってるんだ」と生意気にも思いましたが、実際の目標よりもさらに高いところを目指させることで我々の意識を引き上げ、我々をリードしたのだと思います。高校２年のとき県総体で惜しくも２位、高校３年のとき優勝し、宮崎ＩＨに出場。初戦突破し、全国大会に出場した山東サッカー部の歴史の中でも最高成績を上げました。それもこれも、全国で勝つためのチーム作り、意識改革をはかってきた佐竹監督の手腕と言えます。先生は試合中熱く声掛けしていますが、得点が決まった時や勝利した瞬間は常に冷静で、ガッツポーズ姿を見たことがありません。常に次の展開、次の試合を見据え、いち早く気持ちの切り替えをしておられたのだと思います。

先生は我々の卒業とともに県庁の方にご栄転されましたが、先生自身もっともっとサッカーの監督をされたかったようですし、我々教え子も、もっと佐竹先生の率いるチームを見たかったというのが本音です。

その後、長い学生生活を終え、私は教員採用試験を受けました。最終面接まで行ったとき、二人の面接官のうち一人が何と佐竹先生でした。もう一方が多くの質問をし佐竹先生はメモをしていただけでしたが、最後に一つだけ「あなたは学生時代サッカーをしていたようですが、サッカーで得たことは何ですか」と質問されました。私はサッカーから学んだことは数え切れないため一瞬答えに窮しましたが、咄嗟に「素晴らしい恩師と素晴らしい友人を得ました」と答えました。先生も反応に窮したのでしょうか、その時の先生のちょっと困ったような顔はいまだに忘れられません。

そして、恩師―教え子という関係は、平成25年度に佐竹先生が山東の校長となられてからは、校長と教員という関係にもなりました。佐竹校長は、あらゆる部の試合・発表にもこまめに顔を出し、生徒や職員の激励を続けました。サッカー部の試合にも足繁く通って下さいました。現在サッカー部監督をしている私が、ある試合で「シュン、何やってんだ」と叫ぶと、「シュン、気にすんな」との先生の声が響いたこともありました。先生の言葉を借りるならば「監督を叱咤し選手を激励」して下さいました。先生の声は、多くの保護者の歓声の中にあっても遠いベンチにいる我々に良く聞こえ、山東サッカー部同期で現在同部コーチをしている齋藤と「恩師の声だけは聞き取れるもんだね」とよく話をしたものです。先生は校長としてエネルギッシュにお仕事されていました。「お忙しいですか」と聞かれると「校長以外、先生方は皆忙しいです」とよくおどけて答えておられました。また、一般職員や生徒との交流を何よりも楽しんでおられました。昨年のクラスマッチにて、職員チームの一員として出場され、左打者として快音連発、生徒たちをなぎ倒し職員チームの優勝に貢献。その日の祝勝会を一番楽しんでいたのは校長先生だったような気がします。また、２年連続で校内駅伝大会のフルコース３ｋｍを走破。おそらく山東の歴代校長の中で初と思われます。やはりスポーツマンでいらっしゃいました。奢り高ぶらない謙虚さ、フラットな関係を好む飾り気のなさ、我々職員への気遣いにあふれた校長先生でした。もともと教え子として先生のお人柄を尊敬しお慕い申し上げておりましたが、部下として仕え、尊敬の念がさらに深まりました。

今年３月、退職間際に教え子のサッカー部員有志で内輪の慰労会を開いた際、４月以降の話をふられると、「何もしね。モンテディオと山形東の応援するだけだ。」と繰り返しお答えになっ

ていました。奥様も同時に若年退職されたとのことだったので、退職後の生活をお二人でゆっくり楽しく過ごすということなのか、もしかして、前年に手術された箇所がお悪いのか、どちらかかと思いました。前者であることを願いつつ。

その時もそうでしたし、山東の職員が退職の折に聞いた時も、佐竹先生はそのようなぼやかした受け答えをされておりました。お病気のことは一切明かさず、退職されました。４月末にサッカー部の保護者激励会に参加してもらったのですが、その時は退職時よりもまた少しお痩せになり、そしてテーブルの食事を一口も口にしませんでした。その直前４月に入院していた、と聞いていたものですから、先生が無理して参加して下さったのだな、とすぐわかりました。

５月末に佐藤敏彦先生や鈴木正浩先生から私に至るまで、歴代サッカー部顧問による佐竹先生退職慰労会の企画がありました。が、直前、手紙が来て、実は入院している、自分なしで会はぜひやってもらいたいという文面の手紙、そしてご芳志が封に入っておりました。主役がいないのでは会をやっても・・・と思い、会をキャンセルし、ご芳志を山大病院にお返しに行くと、抗がん剤の治療の効果が出始めたのでしょう、髪は一段と薄くなり、さらに痩せていました。その際「実は消化器のがんで」と打ち明けて下さいました。私は昨年度入院されたときから「おそらく胃がんだろう」と思っており職員でもそう噂していたので、意外でも何でもなく、「どちらのがんですか？」と躊躇なくお聞きしました。すると「実は膵臓なんだ」という意外な返答。一瞬絶句しました。発見されにくく、見つかった時には末期という場所であることを何かで聞いたことがあったからです。一瞬の顔のこわばりを気付かれないようにとすぐ「摘出手術はできるのですか？」とお聞きすると「できる場合とできない場合があり、私はできない方だ」とのこと。その後は、病気のことは「抗がん剤治療頑張って下さい」と声をかけたくらいで、これからある県総体のこと、佐竹先生の県総体の思い出などを 30 分ほど話し、病院を後にしました。先生は痩せておりましたが、明るくまだまだお元気そうに見えました。佐竹先生から膵臓がんのことは口止めされておりましたが、関係の深さを考え、鈴木正浩先生にだけはお伝えし、またお見舞いし激励する関係からサッカー部の先輩・同期・後輩には伝えました。サッカー部ＯＢＯＧ有志で６月 27 日に病院で、８月 14 日にご自宅でお見舞いしたときも、つらそうな表情は一切見せずに先生は終始楽しく過ごされたように見えました。心配かけまいという気遣いもあったことでしょう。

退職後、実際にお会いしたのは以上のように数限られていますが、サッカーの公式戦の節目節目にはメールにて連絡し合っておりました。サッカーで勝って先生を喜ばせようと意気込むものの、先生のように手腕を発揮することができず負けてばかりいる私を、いつも励まして下さいました。私の方が先生の闘病を支え激励申し上げねばならないにもかかわらず。

亡くなる 10 日前、地区新人大会の初戦に負けて、８年ぶりに県新人戦に出場できなくなった折に報告した際の ９ 月 13 日の返信が最後のものとなりました。私信ながら一部抜粋します。「新人大会お疲れさまでした。なかなか思うようにいかないこともあると思いますが、生徒には自信を持たせ、がんばらせてください。」

佐竹先生、私は今、先生という支えをなくし、茫然自失のあり様です。もっともっとお元気でご活躍され、山形県の教育界をリードして頂きたかったですし、山東サッカー部の応援もして頂きたかった。悔しい気持ちでいっぱいです。しかし、先生が一番悔しいんでしょうね。亡くなる直前、初孫を見ることができたそうで、それがせめてもの救いです。あちらの世界で、一昨年亡くなられた山東サッカー部後援会武田栄四郎前会長から、「何だ、佐竹先生、早すぎるんねが？」と聞かれ、相変わらずの腰の低さで「憎まれすぎたんで早く来ることになりました」などとおどけている姿が目に浮かぶようです。

佐竹先生、本当にお疲れさまでした。これまでのご指導、ご厚誼の数々本当にありがとうございました。合掌。

無念　1シーズンでのY1陥落

9月21日（月）、26日（土）とＹ１の13節14節がありました。Ｙリーグは基本８チームの2回総当たりなので、最終節は14節。そうです、いよいよクライマックスです。山東の相手は、21日城北、26日鶴東。すなわち、**下位２チームの自動降格枠を争う城北・鶴東・山東３チームによる天王山２連戦**。Ｙ１優勝は12節の時点で（というか10節くらいで）日大山形が決めている[1]。あとは、下の争いのみ。山東は、後期新チームになってから勝ち点がない。接戦もありましたが、結局競り負けている。山形の強豪私立高校を長年率いたある先生が以前言っておりました。「全国の強豪に惨敗する状態から惜敗するまで来るのにかかった期間よりも、惜敗から勝ち切るまでにかかった期間の方が長かった。」これは勝負の世界の真理を突いているでしょう。「惜しかったが負けた」というのは、勝利に近いように見えて、実は結構差がある。勝利とはそれくらい厳しいもの。そうですね～。

まず城北戦から振り返りましょう。山東キックオフ、ボールを下げて、ＳＢがパスカットされ、そのまま攻め込まれ、ＣＫに逃げる。そしてそのＣＫで、ヘディングによりズドン。前半0分で失点。**甘いプレーが三つ続いた末の失点**。その後、一進一退でしたが、結局山東はネットを揺らすことができず。途中出場のタクオが鋭くゴールに迫ったり、サンペーがドリブルからシュートを放つなど、見どころはありましたが、結局無得点。いずれも最後の最後の城北の守備をはがすことができないままでした。2失点目はＤＦが自陣ゴール前でボールを奪われ、そのまま決められる形。3失点目はまたもやＣＫ。1失点目と同じくゴールからやや遠いところ[2]のボールを、コースを変えられファーサイドに流れたボールをフリーで決められる。**いずれもあっけない形**。0対2の時は押せ押せでしたが、3失点目を喫し、万事休す。**空中戦含め、ボールをめぐる攻防において厳しさの足りない欠点**が端的に表れた試合となりました。

次に鶴東戦。最悪の試合の入りは今回も同じ。山東スローイン、投げ場所に困るＳＢ。適当に前方に放り、ヘディングで返される。そのルーズボールをＦＷに斜めにゴール方向に運ばれる。寄せが甘すぎる。そのボール結局逆サイドまで運ばれる。そして、ふわりとしたクロス。ボールが相手選手に当たる。飛び出したＧＫの脇を、コロコロとボールがゴール方向に転がり、失点。「何それ？」と目を覆う開始間際の失点劇。**後藤報道局長のＨＰの解説にあるように、学習能力がない**。そして、サイドで股抜きされ、そのまま何人かシュートモーションに引っ掛かり剥がされ[3]、シュート、追加点を決められる。股抜きされて抜かれるＳＢも最悪ですが、インサイドですぐ自分が背負った相手を受け渡す選手も悪すぎる。その後、**途中出場のタイセーの見事なファインミドルシュートで１対２で前半を折り返す**も、後半、またもや寄せが甘くなったところをシュートされる。ボールの勢い、ゴールからの距離を考え、「打たせんなよ」くらいにしか思っていなかったボールが、なぜかネットを揺らす。1対3。で、結局敗戦。**攻撃でもパスミスの連発**で、ゴールは決まりましたが、城北戦の方がまだよかった、という最終節をしてしまいました。

やはり、この一年感じてきたことですが、**安心して（思い通り）ボールを止め蹴ることのできない選手たちが、相手の状況を見て判断してプレーできるわけがない**のです。端的に基礎力不足なのです。進学校大会を経て選手権頑張りますが、まず**来春に向けて、ボールコントロールを上げるしかない！　難しいです、この課題**。応援お願いします。

---

[1] 結局日大は14戦全勝で、プリンスリーグ東北への昇格決定戦に出場することになりました。11月14日（土）宮城代表東北高校戦13：30キックオフ＠米沢市営ＳＦ東。

[2] ゾーンで配置している山東の大型選手にとって、ヘディングしにくいポイントではありましたが。

[3] シュートモーションの切り返しではなく、シュート打つぞ打つぞとボールが中方向に転がりながらカマをかけられ、剥がされたという図。